

教材活用例(5) 「一筋の光を求めて」

〔小学校高学年 主題：故郷の宝 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—畝為吉—について〉

畝為吉は、安芸郡坂町の出身である。坂町に道路やトンネルをつくるために16歳でハワイに渡り努力の末、全私財を投じて遂に完成させることができた。

生涯を通して、郷土の発展を思い続けた先人の人柄や偉業に対して、現在でも地域行事として住民運動会が行われている。



明治22年 (1889年)	坂村に生まれる。
明治39年	ハワイに渡る。
大正15年 (1926年)	ハワイでマットレス工場を開始し、成功を収める。
昭和22年 (1947年)	トンネルの計画を息子らに明かす。
昭和24年	トンネル工事の起工式を行う。
昭和26年	トンネル工事が完了する。
昭和63年	99歳で大往生を遂げる。

畝為吉の経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、為吉の考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	植田地区にある畑に行くのに、狭く険しい西嶽峠を登り下りしなければならなかった。重い荷物を背負っての峠道は、為吉や村人に苦勞を強いていた。	呉線の敷設工事で坂村にトンネルが開通したことにヒントを得て、トンネルをつくることを決意する。「自分の一生はこの山にありこの道にあり」と、単身ハワイに渡りさまざまな苦勞の末、工事の費用をつくることに成功した。	40数年間温めてきた計画を明らかにし、地区の代表者に協力を求めた。上条・植田両地区から総出でトンネルの工事を行い、為吉自身も自ら作業に加わり1年4ヶ月続いた工事が無事終了し、ついにトンネルは開通した。	地元の多くの人たちによって感謝の気持ちを込めた石碑が建てられた。今でも開通を記念して始められた住民運動会が行われている。トンネルの両端に「共存共栄」「協力一致」の言葉が刻まれ、為吉の人柄を今もしのばせる。

イ 資料の解説

【作成の要点】

郷土を愛する心を育てるには、児童の内面からの自覚が大切である。郷土の発展に尽くし伝統と文化を育てた先人の努力を知ることで、自分もそれを継承し発展させていくべき責務があることを自覚し、そのために努めようとする心構えを育てる必要がある。

中学年で社会科や総合的な学習の時間に、地域の様子や伝統文化について学んだことを生かし、高学年でそれをどんな人々がどんな思いをもって地域の発展のために尽力してきたかについて考えることにより、主体的に郷土を大切にしていこうとする気持ちが育まれると考えた。

畝為吉は子どものころの体験から自らのことのみならず、危険な峠道を通して畑に通う村人のことを何よりも気に掛けていた。トンネルをつくることを思いつき、単身でハワイに渡ったのも郷土の発展を願うただその一念に違いない。そこには、郷土に暮らす人々のために何かできないかと一心に思う郷土愛にあふれた人間性が見て取れる。他者を思うことでどんな逆境にも屈せず、信念を貫き通す人間の心の強さや尊さを本資料から読み取り、考えることを通して、自分の生活に生かそうとする心情を育てていきたいと考えた。



【心に響くちょっといいはなし】

少年の頃、大変な苦勞をして農作業に向かっていた経験が、その後の畝為吉の人生を決定づけた。ハワイに渡ったのも坂村の発展の為に道路を通したかったからである。トンネルを通したのはこの道の延長線上にあり、西嶽峠^{にしだけとうげ}を貫くトンネルを開通させたことで上条側と植田側の行き来が楽になった。

為吉はとにかく謙虚な人だった。トンネル工事の費用に全ての私財をなげうったことはいうまでもなく、トンネル工事が始まると、自分の畑で取れたスイカを村人にふるまったり、自らも工事に参加してスコップをふるったりして働いた。自らの偉業をひけらかすことも、銅像の話に耳を傾けることもなく、その意志は一貫して「ふるさとのため」「人々のために」と一度も揺らぐことはなかった。

ウ 資料全文

「一筋の光を求めて」

—畝 為吉物語—



渡航当時の畝為吉氏

今から約110年前。

14歳の為吉は、真夏の峠の急な坂道を登り、急しや面にへばりつく段々畑へと向かった。背負った重い荷物が肩にこいこむ。鼻が地面につくくらい体が曲がり、背中を起こすと後ろに倒れてしまうくらいの急な坂道だった。

「なんとかならんものかなあ・・・」

為吉が家の手伝いをするために通るには、あまりにつらい峠道だった。村人もまた、この峠で不便をしいられていた。

ある時、手伝いを終えた為吉が段々畑のあぜ道から、海岸沿いを通る呉線を眺めていたが、急に立

ち上がり水尻トンネルに目をやった。

「これだ。この山にトンネルを通そう。」

為吉の頬は夕日に照らされます赤くほてった。しかし、トンネルを掘るにはとてつもないお金がかかり、そう簡単に実現できることではなかった。

それから3年。16歳になった為吉は、当時の日本が外国移民のしょうれい⁽¹⁾を行っていたことを知り、(これはチャンスだ)と、両親の許しを得てハワイに行くことにした。もともと農作業には慣れていた為吉ではあったが、常夏の島の広大なサトウキビ耕地で、朝から晩まで土を掘り、掘っては耕し掘っては耕し・・・毎日太陽に照らされ、常夏の島での重労働はなみたいていの苦労ではなかった。しかも一日の賃金がわずかで、

「いつまでもこんなことをしていたのでは、トンネル工事の費用など何百年先になることやら・・・トンネルづくりはやはり夢物語じゃっただろうか。」

と、たった一人途方に暮れたため息をもらした。

しかし、悩み続けたある日のことだった。段々畑に続くけわしい峠道を、息も絶え絶え歩いている村の人や、坂村に残してきたなつかしい両親の夢を見た。

「ここであきらめるわけにはいかない。」

目が覚めた為吉はこの日を境に人の十倍働いた。そして、人の十倍もの苦労もした。そのかいあって、ついにマットレス工場⁽²⁾をつくり成功をおさめてたくさんのお金をためることができた。それは、ハワイにわたって20年がかりのことだった。

それからさらに20数年後、為吉は日本にいる息子たちにこんな手紙を送った。

・・・実はわたしは、40 数年間、上条・植田間に道路やトンネルを通す夢をもっていた。もしも賛成してくれるなら、地区の代表者にそのことを相談し協力してもらえるよう頼んではくれないだろうか・・・。

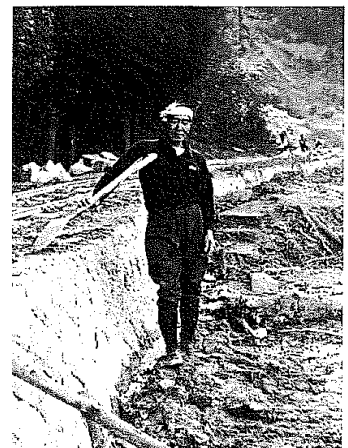
為吉がそんなことを考えていたことを初めて知った息子たちは、とまどいをかくせなかった。村人たちは始めは半信半疑だったが、為吉の熱い思いに応え地区の代表たちは何とか賛同してくれた。息子たちが早速そのことを知らせると、為吉は長年の夢が実現する喜びにふるえた。

ハワイでの最後の仕事を終わらせると、その2年後には坂村にもどり翌年から念願の工事が始まった。工事は上条・植田の両地区から三百軒余りの人々が総出で取りかかった。為吉も自らスコップをふるい作業現場で働いた。40年という長い年月を費やしてつくったお金は全て工事のために使った。それにもかかわらず為吉は人々に頭を下げて、

「ごくろうさんです。ようようしてくれんさった。」



毎年行われている住民運動会

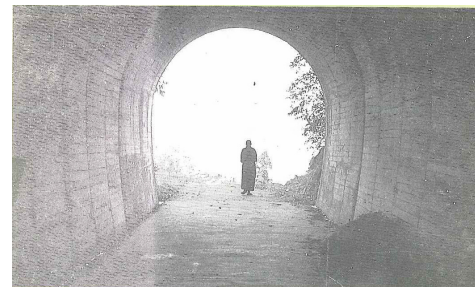


工事現場に立つ、為吉

と、やさしい目差しを向け人々にお礼を言って歩いた。さらに、子どもたちのためにと児童公園やプールもつくった。いつも周りの

人々に気を使う為吉だった。こうして1年4ヶ月におよぶ工事が終わり、桜の花が咲き始めた暖かな春の日、ついに念願のトンネルは完成した。人々は手を取り合って喜びの声をあげ、歌に合わせて踊り祝った。

今ではトンネルの完成を記念して、毎年この公園で住民運動会が行われるようになった。
「畝のおじいちゃんがね、みんなのためにトンネルをつくっちゃったんだよ。」
あるお母さんが、運動会にはしゃぐ子どもたちに話して聞かせていた。
「坂町のために力を尽くした為吉さんの銅像を建てようじゃないか。どうかね為吉さん。」
そんな声も上がったが、
「わしは銅像など建ててほしゅうない。この仕事はみんながしたもんじゃ。これからもみんな仲良く
すりゃあええ。」
と、為吉はその話を堅く断り続けた。ただ、トンネルの東側に「協力一致（きょうりょくいちち）」
西側に「共存共栄（きょうぞんきょうえい）」という文字を残すことだけ注文して・・・



上条側から見たトンネルの向こうに海が見える

【注】

- (1) 開国後の日本は、第二次世界大戦後に至るまで、労働力が過剰であったことから、外国へ移り住むことがすすめられていた。
- (2) ベッド用の敷ぶとんを生産する作業場のこと。

【参考文献】

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| 山根 富士夫 上条地区住民福祉協議会（平成 4 年） | 畝為吉翁の偉業-上条トンネルの話- |
| 新木 正司 （昭和 60 年） | 坂町海外活躍史 |
| 坂町社会科副読本編集委員会（編集）（平成 14 年） | わたしたちの坂町 |

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

生涯変わりなく郷土を愛した為吉の心情を中心にした展開
～視聴覚機器を生かした指導～

- (ア) 主題名 郷土愛 4－(7)
- (イ) ねらい 為吉がトンネルをつくろうと決心してハワイで苦労を重ねたことや、思うように資金がたまらず苦悩する姿を通して、郷土の発展のためにくじけず努力することの尊さを知り、40年あまり変わることのなかった気持ちに沿いながら郷土を愛する心情を養う。
- (ウ) 資料名 「一筋の光を求めて」

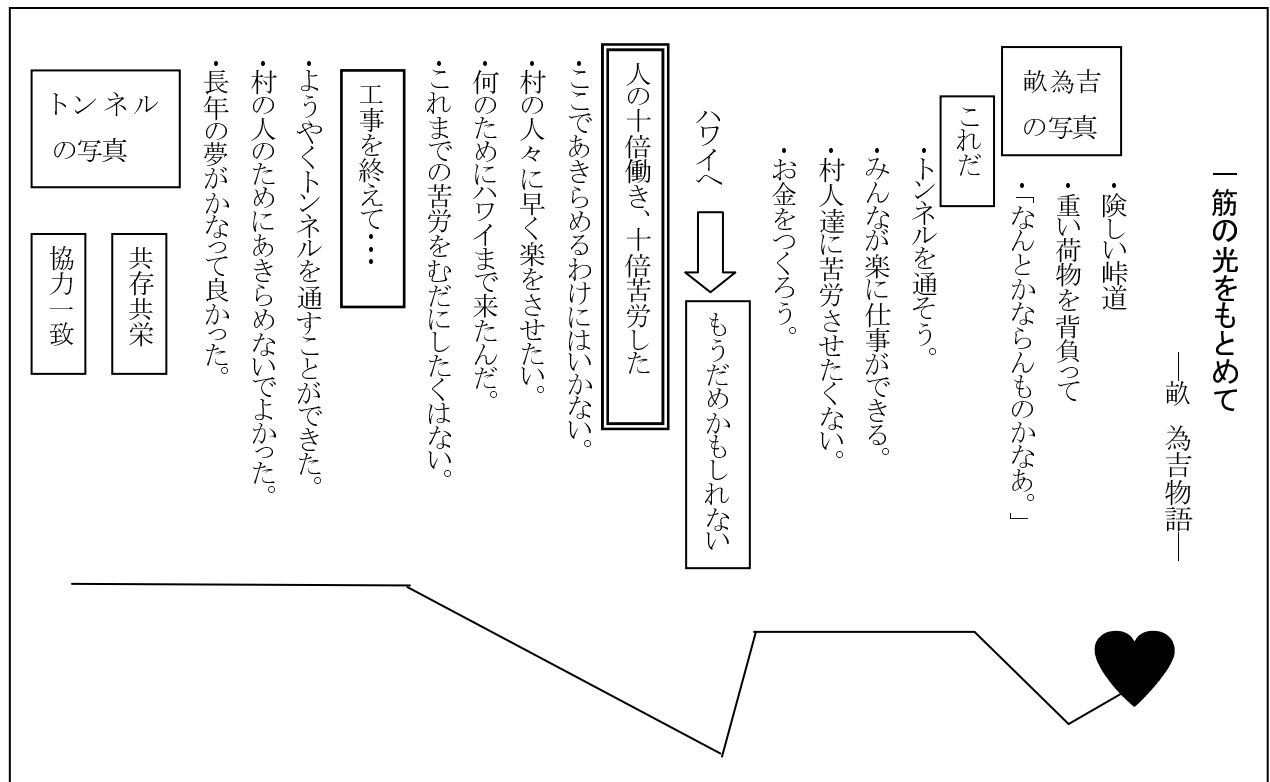
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 坂町のよさについて話し合う。	○ 坂町の宝とは何でしょう。 ・曳船・横浜踊りなどの伝統文化がある。 ・古い歴史を大切にしている。 ・海や山の美しい自然がある。 ・人々が親切であたたかい。	○ 祭りや踊りの様子，山から見える海を写真で確認する。
展開	2 資料前半を読んで話し合う。 ・ビデオ「昭和からの手紙」前半を視聴する。	○ 「これだ。」と思いついた時，為吉はどんなことを考えていたでしょう。 ・トンネルさえあればこんな苦労はしなくて済む。 ・村の人々のために自分ができることを見つけたぞ。 ・必ず峠にトンネルをつくるぞ。 ・トンネルさえあれば，村のみんなに楽をさせることができる。	○ 時代背景や当時の日本の様子について補足説明をする。 ○ ビデオ「昭和からの手紙」前半を視聴して資料の内容にせまらせる。 ○ トンネルをつくろうと決意した為吉の心情に共感させる。
	3 資料後半を読んで話し合う。 ・ビデオ「昭和からの手紙」後半を視聴する。	◎ 目覚めた為吉が人の十倍働き，十倍苦労をしたのはどんな気持ちからでしょう。 ・ここでくじけるわけにはいかない。初心を忘れてはいけない。 ・せっかくハワイまで来て苦労してきたことを無駄にしたくない。 ・今でも坂村の人々は不便な道を通して苦労しているのかと思うと何とかしたい。 ・何年かかってもトンネルがつくれるだけのお金を稼がなくてはならない。 ・絶対にトンネルをつくるまでは日本に帰らない気持ちが強くなった。 ・どんなに苦しくても，あきらめるものか。 ○ 為吉はどんな気持ちでトンネルの完成を見ていたでしょう。 ・これからもみんながいつまでも仲良く，協力し合って暮らしていってほしい。 ・みんなのために苦労してよかった。 ・これからも坂町が発展することを願っている。 ・今までがんばってきたことは間違っていなかった。	○ ワークシートの吹き出しに書くことによって，夢と希望を失いつつあったが，それでも諦めなかった為吉の気持ちを深く考えさせる。 ○ ビデオ「昭和からの手紙」後半を視聴して資料の内容にせまらせる。 ○ 為吉にとって，坂町の人々が一丸となってトンネルをつくったことが何より嬉しかったことに気付かせる。 ☆ 視聴覚機器の利用は，児童の理解を助け，郷土の先人の偉業とそこに至る心情を自分たちの生活に引きつけてとらえることができたか。
終末	4 授業の感想を書く。	○ 今日の授業の感想を書きましょう。 ・上条トンネルをつくるために地域の人々がみんな協力していたんだな。 ・自分も坂町のためにできることはないかな。 ・坂町をもっと住みよい町にしていきたいと思った。	○ 為吉と自分を重ねて見つめさせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(カ) 板書例



【板書の構成】

発問を短冊に書き内容の順に右手から提示する。中心発問は板書の中心におき、価値にせまらせたい。児童の発言はキーワードを残して書き、自分の考えと友達の考えを比べながら学習できる手立てとする。また、下段に心情曲線を用いて前段の為吉の心情の変化が目で見取れるようにする。

最後に「共存共栄」「協力一致」とトンネルの写真を貼付し、ねらいである「郷土を思う気持ち」を一層印象付ける。

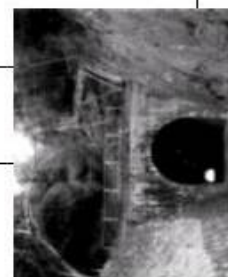
(キ) ワークシート

一筋の光をもとめて

年 ()

◎ 恭吉が人の十倍働き、十倍苦労をしたのはどんな気持ちでいた
かをいしょう。

◎ 今日の授業の感想を書きしょう。



(2) 活用のポイント

本題材のねらいは郷土の発展の為に尽くした先人の努力を知り、郷土を愛する心情を養うである。ねらいを達成するために補助発問では、トンネルをつくろうと決意した為吉の心情について考えさせる。次に中心発問で主人公の心の葛藤に共感させた後、ワークシートを活用して考えを深める工夫をしたいと考えた。また、資料の歴史的背景や当時の人々の暮らしがわかるようにするため、視聴覚機器を活用し児童の思考を支援していきたいと考える。さらに中心発問や終末の場面で、自らの考えを深め整理することができるように、書く活動を取り入れる。

以上のポイントを踏まえ、本資料で児童が郷土に対する思いを深め、地域の発展のために努めようとする心構えを育てていきたい。

ア 発問の工夫

中心発問では、主人公が味わった挫折感や焦燥感を乗り越えて、仕事に打ち込むことにした点に着目させたり、補助発問として、主人公がこれからの町の発展を願う心情に迫らせ、価値の一般化につなげたい。

イ 視聴覚機器を生かした指導

100年以上前の歴史的背景や当時の人々の暮らしについてわかりにくい部分を補う効果があると考えた。

ウ 書く活動の工夫

中心発問では、ワークシートを用いて書く活動を仕組み、児童がじっくりと自分の考えを出せるようにし、終末では感想を書かせ、価値の一般化を図るようにしたい。

(3) 授業の実際 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

発問は為吉の言葉や行動の裏側にある気持ちを問うことで、ねらいに迫らせたいと考えた。

導入では、坂町の宝について想起させて、伝統文化や自然などについて話し合うことによって、児童が本時の資料に関心をもち、終始郷土についての意識を共有化することができた。

中心発問では、「もうだめかもしれない。」とい

う挫折感に陥った為吉の気持ちに沿わせた後、そこから気持ちを切り替えた点に着目させた。その際、道徳的価値に対する弱さに触れさせるため、教師が揺さぶり発問をしたことにより、為吉の心の深い部分にまで掘り下げていくことができた。

イ 視聴覚機器を生かした指導

資料の文章からでは理解しにくい表現がいくつかある。しかし、100年前の時代背景や用具の名前などがビデオでは映像としてうまく表現されており、児童が関心をもって視聴することができた。また、児童は、村人が不便を強いられていた状況やトンネルをつくろうと思いついた経緯が把握しやすくなり、為吉の気持ちを考える上において効果的であった。

ウ 書く活動の工夫

葛藤を乗り越えた行動の裏にある気持ちをじっくりと考えさせるために、時間を十分確保しながら、ワークシートに考えを書かせた。書くことによって自分の考えを整理し、ワークシートを手がかりとして発言する児童が多かった。

【児童の感想から】

- ・坂道を上り下りする村人の苦労を忘れないで、みんなのためにがんばろうと思った。
- ・トンネルをつくることが自分の夢でもあったし、両親や村人を助ける方法だったとあらためて思った。
- ・トンネルを通して「畑に行くことが楽になった。」と喜んでくれる顔が一日も早く見たい。
- ・ハワイに行くことを許してくれた両親のためにも、トンネルをつくらなくてはいけない。

等の考えが出てきた。児童の多くが、郷土のために尽くした主人公の心情をとらえることができていた。

また終末では、授業の感想を記入することで、児童が先人の偉業から学んだことをもとにして、自分も郷土のためにできることはないかと意識付けができた。

【児童の感想から】

- ・村人のために苦勞して働いた為吉さんはすごいと思う。坂町の誇りです。
- ・村の人々のためにここまでできるんだ。ぼくも坂町のために何かできることはないかと、考えていきたいです。
- ・坂町のために尽くしてがんばったんだなあと身にしみて思いました。
- ・40年以上かけて夢をかなえた為吉さんを見習って、わたしもがんばりたい。

○ 道徳コーナーへの掲示

校内に設置してある道徳コーナーに、道徳的な価値に関わる言葉とともに、「心のノート」PP. 104-105 の写真をカラー印刷したものを掲示して、いつでも全校児童の目に触れられるようにすることは効果的である。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

児童は3，4年生のときに社会科で地域の古い道具、文化財や年中行事、地域の発展に尽くした先人のことについてふれてきた。

4年生では社会科で「郷土を開く先人の働き」について学習をし、先人が郷土の発展に尽くした史実を調べた。そして、坂町発行の副読本「わたしたちの坂町」を活用して、ワークシートや新聞でまとめてきた。

また、総合的な学習の時間では、上条トンネルや為吉に関連する場所や、親族の方への聞き取りを行った。これらの学習を行った後、「青き一筋の光を求めて」という題で創作劇の台本を作成し、学習発表会で披露した。

このような学習内容を踏まえることによって、資料の内容への関心が一層高まっていく。

(5) 心のノートの活用

○ 道徳の時間

心のノート PP. 104-105 に「郷土や国を愛する心を」というページがある。

導入で「わたしのふるさとしょうかい」コーナーに記入をし、地域の良さにふれて学習に取り組もうとする意欲を高める手立てにすることもできる。

終末で掲載されている詩を読み、郷土を愛した先人の思いを振り返りながら、余韻をもって授業を終えるようにする。

